

一 真夏の宿場は空虚くうつきよであった。ただ目の大きな一匹ひきの蠅はえだけは、薄暗い厩うまやの隅すみの蜘蛛くもの巣すに引っかかる、後足で網あみを跳ねつつしばらくぶらぶらと揺ゆれていた。と、豆のようにぼたりと落ちた。そうして、馬うまふんの重みに斜なめに突き立っているわらの端はしから、裸らたい体にされた馬の背中まではい上がった。

二

馬は一条の枯かれ草を奥おく菌ぼに引っかけたまま、猫背ねこぜの老いた御者ぎよしやの姿を捜さがしている。御者ぎよしやは宿場の横のまんじゅう屋の店頭で、将棋しょうぎを三番さして負け通した。「なに？ 文句を言うな。もう一番じゃ。」すると、ひさしを逃のがれた日の光は、彼の腰こしから、丸い荷物のような猫背ねこぜの上へ乗りかかってきた。

三

宿場の空虚くうつきよな場庭ばにわへ一人の農婦が駆かけつけた。彼女はこの朝早く、街に勤めている息子むすこから危き篤とくの電報を受け取った。それから露つゆに湿しめった三里の山路を駆かけ続けた。

「馬車はまだかのう？」
 彼女は御者ぎよしや部屋をのぞいて呼んだが返事がない。
 「馬車はまだかのう？」
 ゆがんだ畳たたみの上には湯飲みが一つ転がっていて、中から酒色の番茶がひとり静かに流れている。農婦はうろうろと場庭ばにわを回ると、まんじゅう屋の横からまた呼んだ。
 「馬車はまだかのう？」
 「先刻出ましたぞ。」
 答えたのはその家の主婦である。
 「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出ましたな。もうちと早はよ来るとよかったのじゃが、もう出ぬじゃるか？」
 農婦は性急な泣き声でそう言ううちに、はや泣きだした。が、涙なみだも拭ふかず、往還わうかんの中央ちゆうに突き立つっていつから、街の方へすたすたと歩き始めた。

「二番が出るぞ。」
 猫背ねこぜの御者ぎよしやは将棋盤しょうぎばんを見つめたまま農婦に言った。農婦は歩みを止めると、くるりと向き返かえってその淡い眉毛まゆげをつり上げた。
 「出るかの。すぐ出るかの。せがれが死にかけておるのじゃが、間に合わせておくれかの？」
 「桂馬けいまとききたな。」
 「まアまアうれしや。街までどれほどかかるじゃろ。いつ出しておくれるのう。」

2 【厩】馬を飼うための小屋。
 7 【二条】一筋。一本。
 7 【御者】馬車に乗って馬を操あつる人。

1 【危篤】今にも死んでしまいうそなほど病気が重いこと。
 2 【里】長さの単位。一里は約三・九キロメートル。
 13 【往還】人などが行き来する広い道。街道。
 18 【せがれ】「息子」のやや古風な言い方。
 19 【桂馬】将棋の駒の一つ。

「二番が出るわい。」と御者はほんとは歩を打った。
「出ますかな、街までは三時間もかかりますかな。三時間はたっぷりかかりますやろ。せがれが死にかけていますのじゃ、間に合わせておくれかのう?」

四

野末のかけろうの中から、種れんげをたたく音が聞こえてくる。若者と娘は宿場の方へ急いで行った。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。

「持とう。」
「なアに。」

「重たかるうが。」

若者は黙っていかにも軽そうな様子を見せた。が、額から流れる汗は塩辛かった。

「馬車はもう出たかしら。」と娘はつぶやいた。

若者は荷物の下から、目を細めて太陽を眺めると、

「ちょっと暑うなったな、まだじゃろう。」

二人は黙ってしまった。牛の鳴き声が出た。

「知れたらどうしよう。」と娘は言ううちよと泣きそうな顔をした。

種れんげをたたく音だけが、かすかに足音のように追ってくる。娘は後ろを向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。

「私が持とう。もう肩が治ったえ。」

若者はやはり黙ってどしどしと歩き続けた。が、突然、「知れたらまた逃げるだけじゃ。」とつぶやいた。

ぶやいた。

五

宿場の場庭へ、母親に手を引かれた男の子が指をくわえて入ってきた。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」男の子は母親から手を振り切ると、既の方へ駆けてきた。そうして二間ほど離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりヤッ、こりヤッ。」と叫んで片足で地を打った。

馬は首をもたげて耳を立てた。男の子は馬のまねをして首を上げたが、耳が動かなかった。で、ただやたらに馬の前で顔をしかめると、再び「こりヤッ、こりヤッ。」と叫んで地を打った。

馬はおけの手づるに口を引っかけながら、またその中へ顔を隠して馬草を食った。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」

六

「おっと、待てよ。これはせがれのげたを買うのを忘れたぞ。あいつはすいかが好きじゃ。すいかを買おうと、俺もあいつも好きじゃで両得じゃ。」

田舎紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。四十三年貧困と戦い続けたかいあって、昨夜ようやく春蚕の仲買いで八百円を手に入れた。今彼の胸は未来の画策のためにつまんでいる。けれども、昨夜銭湯へ行ったとき、八百円の札束をかばんに入れて、洗い場まで持って入って笑われた記憶については忘れていた。

1 【歩】将棋の駒の一つ。
5 【野末】野の果て。
5 【かげろう】春や夏の晴れて穏やかな日に、地面から炎のようにゆらゆらと立ち上るもの。
5 【種れんげ】種をとるためのれんげ。れんげはマメ科の二年草で、田の肥料などに用いられる。田に種をまく準備として、夏にさやをたたいて種をとる。

5 【間】長さの単位。一間は約一・八メートル。
9 【馬草】馬や牛の飼料とする草。
15 【田舎紳士】紳士ぶっているが、どこか洗練されていないところのある人。
16 【春蚕】晩春から初夏にかけて飼う蚕。
16 【仲買】問屋や生産者から品物を買ひ、それを小売り商に売って、手数料を稼ぐこと。

農婦は場庭の床几から立ち上がると、彼のそばへ寄ってきた。

「馬車はいつ出るのでござんしょうな。せがれが死にかかっていますので、早よ街へ行かんと死に目にあえまい思いましたな。」

「そりゃいかん。」

「もう出るのでござんしょうな、もう出るって、さっき言わしやったがの。」

「さアて、何しておるやらな。」

若者と娘は場庭の中へ入ってきた。農婦はまた二人のそばへ近寄った。

「馬車に乗りなざるのかな。馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者は聞き返した。

「出ませんか？」と娘は言った。

「もう二時間も待っていますのやが、出ませんぞな。街まで三時間かかりますやろ。もう何時になつていますかな。街へ着くと正午になりますやろか。」

「そりゃ正午や。」と田舎紳士は横から言った。農婦はくるりと彼の方をまた向いて、

「正午になりますかいな。それまでにや死にますやろな。正午になりますかいな。」

と言ううちにまた泣きだした。が、すぐまんじゅう屋の店頭へ駆けていった。

「まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬじゃろか？」

猫背の御者は将棋盤を枕にして仰向きになったまま、すのこを洗っているまんじゅう屋の主婦の方へ頭を向けた。

「まんじゅうはまだ蒸きらんかいのう？」

七

馬車はいつになったら出るのであろう。宿場に集まった人々の汗は乾いた。しかし、馬車はいつになったら出るのであろう。これは誰も知らない。だが、もし知りうることでできるものがあったとすれば、それはまんじゅう屋のかまどの中で、ようやく膨れ始めたまんじゅうであった。なぜかといえば、この宿場の猫背の御者は、まだその日、誰も手をつけない蒸したてのまんじゅうに初手をつけるということが、それほど潔癖から長い年月の間、独身で暮らさねばならなかったという彼のその日その日の、最高の慰めとなっていたのであったから。

八

宿場の柱時計が十時を打った。まんじゅう屋のかまどは湯気を立てて鳴りだした。

ザク、ザク、ザク。猫背の御者は馬草を切った。馬は猫背の横で、水を十分飲みためた。ザク、ザク、ザク。

九

馬は馬車の車体に結ばれた。農婦は真っ先に車体の中へ乗り込むと街の方を見続けた。

「乗っとくれやア。」と猫背は言った。

五人の乗客は、傾く踏み段に気をつけて農婦のそばへ乗り始めた。

猫背の御者は、まんじゅう屋のすのこの上で、綿のように膨らんでいるまんじゅうを腹掛けの中へ押し込むと御者台の上にその背を曲げた。らっぱが鳴った。むちが鳴った。

目の大きなかの一匹の蠅は馬の腰の余肉の匂いの中から飛び立った。そうして、車体の屋根の

16 【腹掛け】胸から腹にかけてを覆い、背中でひもを結んで着る職人の作業着。前面に物入れがある。
18 【余肉】余り肉。こぶのように突き出ている肉。

1 【床几】簡易な腰掛け。
2 【死に目にあえまい思いました】臨終に立ち会えないだろうと思ひまして。
17 【すのこ】細く割った竹や板をすだれのように編んだもの。

上に止まり直ると、今さきに、ようやく蜘蛛の網からその生命を取り戻した体を休めて、馬車と一緒に揺れていった。

馬車は炎天の下を走り通した。そうして並木を抜け、長く続いた小豆畑の横を通り、亜麻畑と桑畑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、ようやくたまった馬の額の汗に映って逆さまに揺らめいた。

十

馬車の中では、田舎紳士の冗舌が、早くも人々を五年以来の知己にした。しかし、男の子はひとり車体の柱を握って、そのいきいきした目で野の中を見続けた。

「お母ア、梨々。」

「ああ、梨々。」

御者台ではむちが動き止まった。農婦は田舎紳士の帯の鎖に目をつけた。

「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」

御者台ではらっぱが鳴らなくなった。そうして、腹掛けのまんじゅうを、今やことごとく胃の腑の中へ落とし込んでしまった御者は、いっそう猫背を張らせて居眠りだした。その居眠りは、馬車の上から、かの目の大きな蠅が押し黙った数段の梨畑を眺め、真夏の太陽の光を受けて真っ赤に映えた赤土の断崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下ろして、そうして、馬車が高い崖道の高低でかたかたときしみだす音を聞いてもまだ続いた。しかし、乗客の中で、その御者の居眠りを知っていた者は、僅かにただ蠅一匹であるらしかった。蠅は車体の屋根の上から、御者の垂れ下がった半白の頭に飛び移り、それから、ぬれた馬の背中に止まって汗をなめた。

馬車は崖の頂上へさしかかった。馬は前方に現れた目隠しの中の道に従って従順に曲がり始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車体の幅とを考えることはできなかった。一つの車輪が道から外れた。突然、馬は車体に引かれて突き立った。瞬間、蠅は飛び上がった。と、車体と一緒に崖の下へ墜落していく放埒な馬の腹が目についた。そうして、人馬の悲鳴が高くひと声発せられると、河原の上では、おし重なった人と馬と板きれとの塊が、沈黙したまま動かなかった。が、目の大きな蠅は、今や完全に休まったその羽根に力をこめて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいった。

〈出典 『定本 横光利一全集 第一巻』(河出書房新社、一九八一年)〉

【著者】横光利一(よこみつりいち)

一八九八(明治三二)年—一九四七(昭和二二)年
作家。福島の生まれ。

【著書】『日輪』『機械』『上海』『旅愁』など

3 【亜麻】アマ科の一年草。夏に白や青紫色の花が咲く。

4 【桑】クワ科の落葉高木。葉を蚕の餌にする。

7 【冗舌】うるさいくらいによくしゃべること。

7 【知己】親しい人。

13 【胃の腑】胃袋。胃。

19 【半白】白髪交じりであるさま。

1 【目隠し】馬の注意をそらさないために、両目の外側につける板状の馬具。

4 【放埒】勝手気ままにふるまい、だらしないこと。